長野県革新懇ニュース

2024年９月号
発行日９月10日
会　費　2,000円
購読料　3,000円（送料込）
振　替　00510-3-15971

299

発　行　日本と信州の明日をひらく県民懇話会
（長野県革新懇）発行人：山口光昭　編集長：高村裕
〒380-8790　長野市県町593　高校教育会館内
TEL：026-234-1231　FAX：026-234-2219　ﾒｰﾙ：mail@nagano-kakushinkon.com

＝＝＝＝＝今号の主な記事＝＝＝＝＝

１面　清水春衣さんインタビュー
２面　１面続き、「近現代信州の歴史回廊」村山隆さん
３面　総選挙で市民と野党が政策的に合意。広がる自衛隊の広報活動
　　読者の声、漢字パズル
４面　「雨よ降れ」 自分はどこにいるのか　窪島誠一郎さん
　　「写真で辿る信州と戦争」 北原高子さん
　　映画評論『関心領域』 内山到さん

長野県革新懇　検　索

1953年長野県生まれ。東京農工大学農学部農芸化学科卒業。長野市在住。

日本の農業現場で働く
外国人の実態をテーマ化

清水 春衣（しみず はるい）さん

（第20回『民主文学』新人賞受賞者）

自らの実体験に基づく小説

Q　第20回『民主文学』新人賞受賞おめでとうございます。まずは受賞作「Ｊの子」執筆の動機をお聞かせください。

小説を書きたい気持ちはずっとありました。「現実は小説より奇なり」という言葉がありますが、私が携わっていた農業の現実とそこで働く外国人の不法就労者や研修生の実態が非常に波乱に満ちていたものですから、それらをもとに何かが書けるのではないかと思っていました。そんなとき、民主文学新人賞の募集があることを知り、応募しました。文筆ではフリーランスのライターとして旅行記や店の紹介などの取材・執筆の経験はありますが、小説というのは全く初めてでしたので、勢いだけで書いたようなものだと思っています。

小説の内容は、ほとんどがノンフィクションで、私の実際の体験をデフォルメして書いたものです。もっと重たい問題もありましたが、そうした問題を最初の小説から書く力はないので、自分の経験の中で無理のない範囲で書ければいいと思って挑戦した次第です。小説を通じて外国人就労者の実態や日本農業の現実を知っていただけるということが何より嬉しかったです。

来日した外国人の過酷な実態

Q　農業現場における外国人の不法就労者や仮放免者、その子どもたちの実態はどのようなものでしょうか？

私は農業に携わるなかで、タイやフィリピンの女性を何人も知りました。彼女たちの名前の発音は難しく、Ｊのつく名前が多かったので、この小説を書くにあたって「Ｊの子」というタイトルをつけたわけです。Ｊたちは不法就労や入管に自首して仮放免になっている場合が多く、無国籍の子どもたちもたくさん居ます。子どもたちは本当によく手伝いをしてくれたので、その子たちにご飯を作ってあげたり、僅かなお礼程度のものをあげたりしました。そうしたらある日、知り合いの行政書士さんが「清水さん、お金を出すなんてことをしちゃいけません。彼らは犯罪者の子どもなんですから」と言われてびっくりしました。だって犯罪者ってどこが犯罪なのという話から、犯罪者の根拠となっている入管法について彼女たちから話を聞いたりしました。

私の農地があった北信州も不法就労の外国人が大変多いところです。今日もタイ人の方から仕事がないかと電話をいただきましたが、私が仕事を紹介したらもう犯罪になるわけです。ところが実際には農作業で本当に多くの外国人が働いているんです。それが違法だとしたら全員捕まります。不法就労ですから。

Ｊのモデルになった女性たちは、いわゆる「ジャパゆき」さんで、日本に来て、その後パスポートを取り上げられて、「仮放免」にされたわけです。初めて「仮放免」ということを聞いて、なんとかならないか弁護士さんなどに相談をしたのですが、アイスクリーム1個でもあげてはいけないということでした。

そんな状況なので、私にできることは、経済的なことよりも精神的な援助だと思っていろいろ関わってきました。子どもたちについては無国籍であろうと、教育の機会を与えられているので、学校に通っています。しかし、先生たちも言葉がわからないので、いろいろ困るわけです。ですから私がボランティアとして困ったことがあったら言ってくださいということで、やり取りをしていました。

現実問題の中では「えっ本当にこんなことがあるの？」と思うことがたくさんあります。不法就労については、いろいろな話があります。たとえば彼らが畑仕事をしているときに作業服を着た役場の職員が来たりすると、すぐ逃げるんですね。

また、以前、小布施町にいたときのことです。私は彼女たちから「オカアサン」と呼ばれていたのですが、夜にトントンと戸を叩く音がするから何だと思って出ると「オカアサン、オカアサン助けて」と言って逃げてくるわけです。役場や警察、日本人から逃げて来ます。法的には彼女、彼らを助けてはいけないのですが、そんなことを言っていられませんので、受け入れてゴハンを食べさせたり、お風呂に入れたりしてあげるわけですが、ひと段落すると仕事で次の所に行くわけです。わたしの農園の小屋は駆け込み寺、シェルターみたいな感じでしたが、町の人たちからは「不良ガイジンのたまり場」ではないかと思われ、転居せざるを得ませんでした。

束縛されている外国人農業研修生

Q　農業研修生についてはどのような状況ですか？

実際の農業の現場では、オーバーステイの方たち、不法滞在の方たち、それから農業研修生たちもたくさん手伝いに来てくれています。農業研修生たちはきのこ工場などに技術研修生として来ているわけですが、建前は日本人と交流してはいけないことになっています。いろいろな制約があり、たとえば残業の後の自由時間まで拘束されています。それでも彼女たちは少しでもアルバイトをしたり、自分で畑を作ったりしたいので、朝早くの農作業のアルバイトに来てくれます。ですから、朝早く加工用トマトとか今はケール、あと、にんにくの収穫とかの労働集約的な農作業にはなくてはならない存在になっています。

農業研修生として来ていたわけですが、それは全く名目で実は完全な労働力に他なりません。例えば自分で作物を作ることも禁止しているわけですから、何が農業研修生だと思うわけです。しっかり自由時間まで全部監視され、拘束されているので、コソコソっとウチに来るわけです。だから彼女たちに餃子を作ってもらえば美味しいので「千

【２面に続く】

選評（『民主長野』2023年６月号より
外国人労働者問題にどう向き合うかを問う
橘あおい

新人賞には清水春衣「Ｊの子」を推そうと最終選考に臨み、全員一致で決まった。長野の高原にあるトマト畑で働く非正規外国人労働者の中の「Ｊ」と呼ばれるフィリピン人の女性は、三人の子どもがいるが「無国籍」状態。夫はアルゼンチン国籍の日系人で、就労ビザで働けるが、Ｊは「犯罪者」として、入管法による「仮放免」措置のため働くことができない。深刻な題材ではあるが、彼らに寄り添う「オカーサン」と呼ばれる日本人女性と、「オトーサン」と呼ばれるロレンゾ（ブラジル日系二世）とのコミカルなやりとりが効果的で、理不尽な状況下でも、したたかに連帯して生きる姿を温かく描いているところに注目した。